

105. <アンモニア菌とペガサス>

随分昔に休刊してしまいましたが、昔、「アニマ」という自然や動物をテーマにした月刊誌がありました。博物的で面白かったので、高校の頃、よく立ち読みしていました。その「アニマ」のある月の、「アンモニア菌」の特集を、今でも鮮明に覚えています。

アンモニア菌とは、この下水業界で言うアンモニア菌ではなく、動物の死体や糞尿の跡に発生するキノコの総称で、アンモニアや尿素を資化するキノコです。

アンモニア菌は日本人が発見したキノコ群で、イバリシメジや、モグラの便所からだけ特異的に生えてくるモグラノセッチンタケ（ナガエノスギタケ）などが有名です。

たしか雑誌の中では、人型にアンモニア菌が生えていたという場所を掘ったら、死体が出てきたという、ウソか本当かわからない話が紹介されていて、当時の私の心はとても、ときめきました。

是非、それを見てみたい！

願わくば、TVに死体の第1発見者として登場し、リポーターのなぜ死体が発見できたのかとの問いに、「いや～、キノコが人の形で生えていたんですよ」と、得意げに答えてみたい。

それ以来しばらくは、林の横を通るとき、目の端で人型に生えるキノコを探すのでした。

しかし、人型に生えるキノコはおろか、図鑑で覚えたアンモニア菌の姿すら見出すことはできませんでした。さらに、簡単にアンモニア菌が観察できるという方法として記事に紹介されていた、自分で「いばり」を放出した跡にも、ちっとも生えて来ず、私の中でアンモニア菌は、幻のキノコとなっていました。

時はめぐり、私はJ Sに入社して数年目に、ある処理場で維持管理担当をしていました。

その処理場には、汚泥の乾燥排ガスの高濃度アンモニア排水を処理するために、ペガサス（包括固定化窒素除去プロセス）が導入されていました。

ある日、いつものように点検蓋を開けて、ペガサスの曝気槽の中を覗き込んだ私の目に、何か見慣れないものが。

薄暗い奥のほうでよく見えませんでした。スカムの上にキノコが生えているようでした。瞬間的に「アニマ」のアンモニア菌の記事を思い出しました。

もしかして！

ドキドキしながら近くにあった柄杓で、そのキノコを手繰り寄せようとしてしました。

茶色い細い小さいキノコ！

しかし、ベガサスの送風倍率は高い。

曝気の大波を受けたキノコは、手元に来る前にザップリと沈んで行き、もう2度と浮かび上がってきませんでした。柄杓を持ったまま、私は、呆然と水面を見つめるだけでした。

下水処理システムが本格導入され始めて数十年。全国2000箇所の下水処理場や43万kmの管路内のような特異な環境には、その道の専門家たちが念入りで見れば、想定外の生物の定着、新種の生物の発見があるかもしれません。数年に1回、そういう専門家集団の本格的調査があっても面白いと思います。

<新技術推進課 川上高男>

※ J S 技術開発情報メール No. 118 号(2011/10/5)に掲載